



身辺雜感

白石秀臣

有 難 や

昨年マニラ、香港、台北を視察して、社会保障制度の一端を知ることができたのでご紹介しよう。フィリピンには日本の国民健康保険に相当する制度はなく、社会保険に類するものがあるだけ。

これも名ばかりの保障で、ひどい病気にかゝれば、一カ月は保険が効くが、それから先は見えてくれない。金の切れ目が命の切れ目、というわけ。

香港はものすごい人口過剰で、貧富の差が甚だしい。しかも結核患者の多いので有名である。こゝもお金がなければ医者にかゝれない。たゞ結核で国の

費用で治療をうけられるものは、若い者に限られている。若い者とは二五才以下のものを指す。

どうもそれ以上の者は古い先が短い組に入るらしい。若い者に次の時代を期待することだけは、どこの国でも同じと見える。

それから、死亡した場合、埋葬するだけの土地をもたない者は、一応香港政府が共同墓地に五年間だけあづかってくれる。

五年たつと掘出され、身内の者が引取らねばならぬ。これはまったなしである。そこで土地の人達は、死んで五年間は天国に行けるが、お金がなければそれから先は地獄に落ちると云う。してみれば、日本という処は有難や有難やの国である。

親 ご ころ

親の心子知らずとよく言うが、時には逆のこともある。松橋療護園でも、三月になると普通の学校と同じく学習発表会を計画し、父兄をよんで披露するのが慣わしである。

数年前のこと、一人の母親が、うちの子供は発表会に参加させないでほしいと注文がついた。不自由な姿を人前にさらしたくない、というのがこの母親の本心らしい。

子供は手も足も生れつき不自由ではあるが、他の不自由な子供達と一緒に、幾日も練習をつんでの出場である。

母親の前で、一生懸命がんばりたいと思っているのに、子の心を知らぬ親としてはたまらないらしい。

我々は手足の不自由な子供を見せ物にするために発表会をやるのではないと、憤りがわいてくる。

社会のきびしい試練にたえ得るよう努力させることが、一つの使命である。

母 性 愛

骨の病気にも色々あるが、骨が一寸したことで折れ易い状態にある女の子が、三年ばかり前大学病院から移ってきた。

病院で十回にも及ぶ大小の手術を受けたが、何回目かの手術の際、親の骨を取って子供に植えた方がよいといわれた。

そこで夫婦は三晩も、どちらが自分の骨を最愛のわが子にやるかと協議をつづけたが、母親が自分の骨にしてほしいと頑張りつづけたため、とうとう父親が断念してしまつた。

母性愛というものは大したものですよと、四、五日前にこの父親がしみじみと話してくれた。なおこの子供は、本年市内の

就 職

我々のなやみの一つに、退園した子供の就職の問題がある。最近の求人難の影響もあって、不自由児の就職も決して悪くはない。

大阪、名古屋、岐阜と、県外にもかなり落ちついてはいいるが、中にはどうもうまくいかず帰ってくる例も少なくない。

同居人が自分を見て笑つたからいやになつたとか、仕事がつらいという。親もそんな処に二度と行かせたくないといつてくる。

不自由児の就職で問題となるものは、一般の子供達の就職の問題点にプラスして、からだの不自由からくる気の弱さ、ねばりがたりない、依頼心が強い、というものが障害として横たわっている。

「元気でいるでしょうか」と雇い主に子供の様子を尋ね、「もう半年も前にやめましたよ」といわれた時の複雑な気持ち。

我々はからだだけの治療に走りすぎてはいけない。心の治療こそ根本である。

(松橋療護園長)

現代っ子

渡辺 恵



六三制 野球ばかりが強くなりと思われていると、いつの間にか 黙っちゃおれん 我が子任せでおかるるか

(註) 録巻と赤旗に明け暮れて、授業より入り込みみに出る方々であろうか、父兄の心配も無理ではない (日本談義三三六年八月号 中島一郎)

新背広 タイは彼女のプレゼント (註) 社会への第一歩をふみ出した新卒青年への彼女の心をこめたネクタイ。さらに前途が明るく希望に満ち輝くことであろう (日本談義三三七年四月号 中島一郎) と全く明るくドライな青年がで

ルになってしまつたけれど、ひとのためになることだし、下心もない阿々。

泰勝寺公園は、市の管理になってから入口を正門の右側に設けて、すぐお庭へ出るように開いた。誘いこまれるまま池の端に添って逍遙すると、左側に有名な苔園である。

四、五年前に客を案内してきたときは、正門の石段を上って、長岡家の玄關に許しをうけたのち、長屋を廻って、まず細川家墓所に出た。ガラシャ夫人の伝説的な魅力に惹かれて一巡し、そのあと、この苔庭のところに

細川家の菩提寺とはいふものの、いま公園として利用している人々には、墓よりも庭であるう。市がまず庭へ通した意図もよくわかる。

ところがこの苔庭も踏み荒らされて、心ない人を恨みたいよいうな一時もあったが、今は柵に保護されて、損傷が減ってきた。もとの姿に早くかえつてもらいたいものである。

苔園の前の広場は、ちよつとした梅園になつてゐる。一面に小砂利を敷きつめて、なかなか清潔になつた。中央の一本が紅梅で、ピシッリ花弁をつけている。

私が最初にこの場所を見たとき、変らぬものが一つあつ

明けまして

おめでとうございます。 ぼくは先生が 大すぎです。 いつまでも この学校 についてください。

五年〇組 〇田〇一

何と明るくうれしい年賀状でしょう。このようなもったいない賀状を受けては、校長もって瞑すべきであるとともに、今どきの子供の簡明率直、しかもそのドライな一面をはっきり表わしているようです。 ツイストがはやるツイスト・ナンバーワンを歌いながら

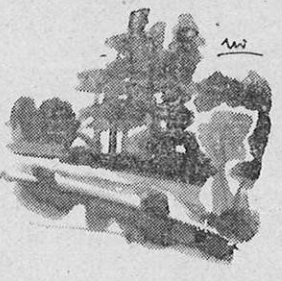
おどり、橋幸夫の「江梨子」に甘い声を流し、九ちゃんの「上を向いて歩こう」に口をよじらせる子供たち、それが今どきの子供の生感であり、それこそいわゆる。現代っ子、だ、という人があります。

おとなも子ども同じものを聞いたり見たり考えたりしていると、おとなの考えが子供にしみとおり、子供の発想がおとなのものになりがちです。

生活状態の同一条件から生み出されるおとなと子供との接近は、幼稚園から小学校、小学校から中高へと学校の教育課程ははつきりと段階教育に秩序(?)を打ち建てておられますが、マスコミの発達したこんにちの状態では、歌もおどりと、話しこともばもはてはセックスの面までもが「子供らしい子供」でなく

なっていくのは、ある程度やむを得ないことも知れませんが、しかし、ドドン・パーと流行にのる子供、先生が好きですと校長に訴えるドライな子供、おとなと同じ言動に満足する子供たちを、そのまま、現代っ子と呼ぶにはあまりに早計のようです。

現代っ子、の名付け親といわれる「現代子供センター」の阿部進氏は、現代の子供を四つのタイプに分け、現代っ子とは、「(前略)世の中をかえ



泰勝寺の

空気はうまい

轟 周平

私は自分でもわかるくらい小

さなことを気にするたちである。

たとえば寝台車で、係の人が毛布を打ち振りながら整理し出すと、せまい道路に立つて思うのである(窓も開かないこの列車は、相当なホコリだらうな)。

でも席ができると、すぐまた話してむのだけれど、意外なこと、ホコリは斜光線に透かしても殆んど見えない。まったくあの換気装置はよくできたものである。ここで漸く私は安心して呼吸をし、窓外の景色を賞するだけの余裕ができる。

よく似た話だけれど、都会に生活する人たちは、ホコリに馴染んで、そのことを大して気にしない。郊外に出て見ると、街の上空は灰紫色のモヤに覆われて、その下に住むことの不愉快さが気になるのだが。

それだけに、泰勝寺の庭の緑は、新鮮さが目にしむようだ。ここのみどりは生まれたままである。笹の葉がほんとうに青竹色に見えるし、杉の巨木群の根を張る地面の、苔の色は深々と美しい。

ホコリと絶縁した、静寂な自然公園が、こんな手近かな市内にあることは私たちにあって幸である。十円を支払って深呼吸にくだけの価値は十分にある。これは市役所のコマーンシャ